



TITLE:

# 近世朝鮮時代の古朝鮮認識 (特集 東アジア史の中での韓国・朝鮮史)

AUTHOR(S):

矢木, 毅

---

CITATION:

矢木, 毅. 近世朝鮮時代の古朝鮮認識 (特集 東アジア史の中での韓国・朝鮮史). 東洋史研究 2008, 67(3): 402-433

ISSUE DATE:

2008-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/152116>

RIGHT:

# 近世朝鮮時代の古朝鮮認識

矢 木 毅

はじめに

一 國號の制定

二 平壤と朝鮮

三 もう一つの系譜

四 古朝鮮認識の擴大

おわりに

はじめに

王朝國家の國號は、たとえば中國では漢・唐・宋のように始封の地名を以て、または元・明・清のように文義を以て定められ、それらは一般に「二字」であることを通例とする。これに對し、朝鮮半島に展開した歷代諸王朝の國號は、たとえば「斯盧」が「新羅」と改稱し、「伯濟」が「百濟」と改稱し、「高句麗」が「高麗」と改稱したように、固有語による部族呼稱（ないし地名）をある時點で中國風に文義を以て改稱したものが多い。それらは一般に「二字」の國號であることを通例とするが、それは中國を中心とするいわゆる「冊封體制」のなかに、これらの諸王朝の君主が「外臣」として參入し、「二字」の國號をもつ「内臣」の諸王より一等級格下の「二字」の國の待遇を以て位置づけられたことを意味している。<sup>(1)</sup>

「新羅」、「百濟」や「高麗」などの國號は、もとを質せば「斯盧」、「伯濟」、「高句麗」などの土俗の呼稱を美化したものにすぎないが、それに比べると「朝鮮」という國號は、文義上、はるかに由緒ある中國的な呼稱といわなければならぬ。言うまでもなく、それは殷末の賢臣である箕子が、殷を滅ぼした周の武王によって「朝鮮」に封ぜられた故事に基づいているのである。

箕子の封地である「朝鮮」が果たしてどこにあったのか——そもそもそれが實在したのか——についてはしばらく措く。ただし、それは「二字」の國號であるから、たとえば同じく二字の國號をもつ「中山國」が、一字の國號をもつ「諸夏」の國々の間にあって、ひとり中國化した「夷狄」の國とみなされていたのと同じように、<sup>(2)</sup>「朝鮮國」もまた「諸夏」とは異なる「夷狄」の文化圏において、やや中國化した獨自の文化をもっていたことは間違いない。少なくともそれは「箕子」の末裔と稱する首長に率いられた、半ば中國化した文化をもった政治勢力であって、それが前漢の初めに燕人の衛滿によって滅ぼされたということは事實であろう。

衛滿が建てた「朝鮮（衛氏朝鮮）」の首都「王險城」が、その故地に設けられた漢代の樂浪郡の治所、すなわち大同江下流の現在の平壤の對岸に存在したことは、二十世紀初頭の考古學的發掘によって實證されたとおりであるが、だからといって、衛氏朝鮮に先行するいわゆる「箕子朝鮮」が、これもはじめから今日の平壤の一帶に存在していたということはできない。少なくとも確實にいえることは、それが中國文化圏の擴大とともに、その周緣部に成立した比較的「中國化」の進んだ政治勢力であったということだけであって、その政治勢力の據點——言い換えれば「箕子朝鮮」の據點——が、はじめから今日の平壤の一帶に存在していたのかどうかは不明であるとしなければならない。

實際、樂浪郡址の發掘以前、箕子の封地である「朝鮮」については、その所在に關する様々な傳説が流布していた。今日の平壤を箕子朝鮮の故地とするのは、そのような傳説のなかの最も有力なものの一つにすぎなかったが、その傳説はそれを語る人々の間においては歴史的事實として認識され、人々の歴史意識や民族的な領域意識を規定する最も重要な要素

の一つとなった。

筆者は先に「三韓」という概念の成立を取り上げて、それが韓国・朝鮮の人々の歴史意識、領域意識にどのような影響を及ぼし續けてきたのかについて考察したが、今回はそれと對をなす「朝鮮」という概念について、同じようにその成立と變遷の過程を明らかにしておきたいと思う。

いわゆる「古朝鮮」に關する傳説は、そのほとんどが非科學的な言説として近代歴史學によつて切り捨てられてきた。しかし、ここで注目しておきたいのは、その内容が科學的な「事實」であつたかどうかではなく、人々の意識において「眞實」として語り繼がれてきたということ、そのものである。かくして語り繼がれてきた「眞實」が、韓国・朝鮮の人々の歴史意識や民族的な領域意識にどのような影響を及ぼし續けてきたのかについて、「朝鮮」という概念を切り口にその長大な歴史の一端を切り取つてみたい。

## 一 國號の制定

「衛氏朝鮮」の滅亡以來、長らく地圖の上から消え去つていた「朝鮮」という國號が再び登場するのは、朝鮮王朝（一三九二―一九一〇）の成立を俟つてのことであつた。この「朝鮮」という國號を定めたのは、周知のとおり、明の太祖・洪武帝であつたが、そのことについて『朝鮮王朝實錄』太祖元年（一三九二）十一月丙午條 及び二年（一三九三）二月庚寅條には次のように見えている。

藝文館學士韓尙質を遣して京師に如かしめ、朝鮮・和寧を以て國號を更めんことを請う。奏して曰く、「陪臣趙琳、京師より回り、欽齋し到る禮部の咨に、欽奉せる聖旨に、節該に、『高麗果して能く天道に順い、人心に合して、以て東夷の民を安んじ、邊釁を生ぜざれば、則ち使命往來するは、實に彼の國の福なり。文書到るの日、國は何の號に

更むるや、星馳して來報せよ。』とあり。欽此。……臣竊かに思惟するに、國を有ち號を立つるは、誠に小臣の敢えて擅便する所にあらず。謹んで朝鮮・和寧等の號を將つて天聰に聞達す。伏して望むらくは聖裁より取らん」と  
 『朝鮮王朝實錄』太祖元年十一月丙午條<sup>(4)</sup>。

奏聞使韓尙質、來りて禮部の咨を傳う。上、帝闕に向かいて謝恩の禮を行う。その咨に曰く、「本部右侍郎張智等、洪武二十五年閏十二月初九日において欽奉せる聖旨に、『東夷の號は、惟だ朝鮮の稱のみ美なり、且つその來たるや遠し。以てその名に本づきてこれを祖すべし。天を體し民を牧し、永く後嗣に昌えあれ』とあり。欽此。本部、今、聖旨の事意を將つて、備云して前去す」とあり(『朝鮮王朝實錄』太祖二年二月庚寅條<sup>(5)</sup>)。

自國の國號をわざわざ外國の君主に決めてもらったというこの事實は、近代以降、朝鮮の「事大主義」を示す象徴的なエピソードとして、しばしば貶黜の意を込めて語られることが多い。しかし、明の洪武帝が選んだのはあらかじめ提示された「朝鮮」、「和寧」という二つの候補のなかからであつて、そのうち、洪武帝が第一候補である「朝鮮」を擇ぶであらうことは、やがてその名を以て呼ばれる新王朝の君臣たちにとっては、ほとんど豫定内の事柄であつたにちがいない。

第二候補として擧げられた「和寧」<sup>(6)</sup>は、高麗時代の和州(後の永興府)を指したもので、和州は李成桂の外祖崔氏の郷、すなわち李成桂の誕生の地であるが、それは王室の始封の地名を國號にするという中國の傳統的な慣例を踏まえているにしても、中國の人々にとっては全く何のインパクトも與えない極めて平凡な名稱にすぎない。有體に言えは、それは洪武帝に第一候補の「朝鮮」という國號を選び取ってもらふための形式的な添え物にすぎなかつたであらう。

事實、新王朝ではその國號が「朝鮮」と定められる以前から、すでにその國號の起源である「古朝鮮」への再照明の作業が進められていた。

禮曹典書趙璞等、上書して曰く、「……朝鮮檀君は、東方に始めて命を受くるの主たり。箕子は、始めて教化を興すの君たり。平壤府をして時を以て致祭せしめよ。……」と（『朝鮮王朝實錄』太祖元年八月庚申條）<sup>(7)</sup>。

太祖元年（二三九二）八月、つまり明の洪武帝から「朝鮮」を國號とする正式の決定が伝えられる以前の段階において、すでに新王朝では「朝鮮」の創建者である「檀君」及び「箕子」を顯彰し、自らがその正統を受け繼ぐ存在であることを誇示する作業を進めている。

そもそも、前朝（高麗）に替わって成立した新王朝では、前朝が「高麗（＝高句麗）」の繼承を以てその支配の正統性の根據としていた以上、「高麗（＝高句麗）」の歴史をさらに遡った地點に國家の正統性の淵源を求めていかなければならなかった。後述するとおり、「高麗（＝高句麗）」もまた「樂浪郡」を介して「箕子朝鮮」の傳統を受け繼いだことに、その支配の正統性の一つの淵源を求めていたが、前朝（高麗）に替わって成立した新王朝は、より直截に「檀君」及び「箕子」の「朝鮮」に結びつくことによって、その歴史的、文化的な正統性の據り所を確保しようとしたのである。

新王朝のこのような意圖は、明の洪武帝によっても、期待どおり——ただし部分的にのみ——受け止められていた。

東夷の號は、惟だ朝鮮の稱のみ美なり、且つその來たるや遠し。以てその名に本づきてこれを祖すべし。

というのは、洪武帝の理解においては、新王朝が「箕子朝鮮」の傳統を受け繼ぐ忠實な屬國となり、また自らは「箕子」を「朝鮮」に封じた周の武王のような偉大な君主となることを祈念した言説にはかならない。しかし、洪武帝の理解の及ばなかった部分において、「朝鮮」という國號は、「箕子朝鮮」よりさらに遡って「檀君朝鮮」の傳承にまで繋がっていたのである。

## 二 平壤と朝鮮

新王朝が自ら擬定した「朝鮮」という國號には、「東方」で最初に「天命」を受けた檀君の「朝鮮」と、最初に「教化」を興した箕子の「朝鮮」との、二つの「朝鮮」を繼承するという意圖が込められていた。

このうち、箕子の「朝鮮」が「東方」で最初に「教化」を興したことにについては、『漢書』卷二十八下、地理志下、燕の項に、

殷道の衰うるや、箕子去りて朝鮮に之き、その民に教うるに禮義・田蠶・織作を以てす。……貴ぶべきかな、仁賢の化するや。<sup>(8)</sup>

といて、樂浪郡治下の「朝鮮」の民に、箕子の「教化」による公序良俗が残っていたことを傳えている。もちろん、これは樂浪郡治下の「朝鮮」の豪族たち——いわゆる「箕子朝鮮」の遺民たち——が、自らの歴史的淵源を「箕子」による「教化」の傳承に結び附けて、他の周縁の諸民族、諸部族よりも文明化の進んだ先進民族であることを自負していたことを示しているにすぎない。しかし、この先進民族としての自負は、その後、「樂浪郡」の滅亡によって漢族の支配から解放された「朝鮮」の豪族たちが、あるいは「高句麗」の支配下に入り、あるいは「三韓」の支配下に入ることによって、それぞれ「高句麗」や「三韓」の豪族たちに受け繼がれ、やがて新羅による「三韓」——この場合は高句麗・百濟・新羅の「三韓」を指す——の統一によって、「箕子朝鮮」は「三韓」全體の文明の起源として位置づけられることになるのである。

ところで、この『漢書』地理志の記述には、もう一方の「檀君朝鮮」に關する傳承はただの一言も觸れられていない。

もちろん『漢書』の撰者である班固の關心は、もっぱら中國との關わりの深い「箕子」の傳承におかれていたから、中國と直接關係のない「朝鮮」の固有の始祖である「檀君」の傳承については、かれが關心を持たなかっただけであると考えられることもできるであろう。しかし、中國の他の史書にも「檀君」の傳承を伝える比較的古い文獻が存在しないところを見ると、實際、當時は「檀君」の傳承そのものが未だ成立していなかったと考える方が自然である。

「檀君朝鮮」の傳承の舞臺は、『三國遺事』によれば、太伯山（妙香山）、阿斯達（白岳山、または九月山）などであるが、これらはおおむね今日の平壤の周邊に存在する。しかし、大同江以北の平壤の地は統一新羅の領域外で、それは高麗太祖の「北進政策」によってようやく高麗の領域に入ったにすぎない。したがって、それは高麗時代の中頃、平壤方面に存在した土俗的な信仰を基礎に創出された後世の說話にすぎないということが今日の定説である。<sup>(9)</sup>

平壤を舞臺として創設された「檀君朝鮮」の傳承は、同じく平壤を舞臺とする「箕子朝鮮」の傳承と何らかの形で連結されなければならない。このため、「朝鮮」を建國して「平壤城」に都を置いた檀君は、その後、「白岳山」の「阿斯達」に都を遷し、御國一千五百年にして箕子が「朝鮮」に封ぜられると、これに國を讓つて「藏唐京」に都を遷し、最後は再び「阿斯達」に隠れて山神になったと言われている。<sup>(10)</sup>

では、この「阿斯達」の地は、一體どこに存在したのであろうか。朝鮮時代、一般にそれは文化縣の「九月山」に存在したとされていたが、<sup>(11)</sup>別説によると、それは新王朝の首都、すなわちソウルの地に存在したとも言われている。

内侍李白全を遣わして御衣を南京の假闕に奉安せしむ。僧あり、識に據りて云えらく、「扶疎山より分かれて左蘇と爲るを阿思達と曰う。これ古楊州の地なり。もしこの地において宮闕を營みてこれに御すれば、則ち國祚は八百年を延ぶべし」と。故にこの命あり（『高麗史』卷二十三、高宗世家、二十一年七月甲子條）。<sup>(12)</sup>



右の『高麗史』の記述によれば、『三國遺事』の阿斯達、すなわち「阿思達」は、高麗時代の南京、すなわち今日のソウルの地に存在したことになる。

そもそも今日のソウルは、古くは「平壤（南平壤）」と呼ばれ、樂浪郡の故地の「平壤」に對して、その「王氣」が衰退した場合にこれに替わつて新たに首都となるべき土地の一つとして、古くから風水師たちによつて喧傳されてきたところである。

高句麗の繼承國家を以て自任した高麗にとつて、「平壤」の地は「西京」として「開京」の「王氣」を支える重要な地域であり、だからこそ歴代の國王はたびたび「西京」に行幸してその「王氣」に浴していた。高麗・仁宗朝に妙清らの一派が起した「西京遷都運動（妙清の亂）」は、この種の風水地理説が惹き起こした變亂として古來もつとも著名であるが、その一方で、この「西京」及び「開京」の「王氣」が衰退すると、高麗時代にはたびたびもう一つの「平壤」、すなわち「南平壤」への遷都が議論された。

たとえば、高麗が肅宗六年（一一〇二）にこの地に「南京」を建てたとき、高麗は擡頭しつつある完顔部女眞と曷懶甸の支配をめぐつて全面的な戰爭に突入する直前であつたし、また高宗二十一年（一二三四）に國王が「南京」の假闕に御衣を奉安せしめたとき、當時の西京（平壤）は、モンゴルの侵攻を背景としてその前年に起きた畢賢甫・洪福源らの叛亂によつて、すでに「丘墟」と化していた。<sup>(15)</sup>さらに、高麗末の恭愍王五年（一三五六）からその翌年にかけて、國王が南京の宮闕を修復し、この地に遷都を試みたことや、同王九年（一三六〇）に改めて遷都の地を卜し、一説に「阿斯達」の地とされた臨津縣の「白岳」に「新京」を營んだことは、恭愍王五年（一三五六）のいわゆる「反元運動」、及び同王八年（一二五九）の第一次「紅巾賊」侵攻の事實と密接に關連すると考えられる。

このように「平壤（南平壤）」への遷都の試みは、高麗時代を通して何回も行われているが、それらはいずれも何らかの意味で北方情勢の變化に對應し、「平壤（南平壤）」の「王氣」によつてこれを厭勝する意圖から行われていたことに注目

しなければならぬ。

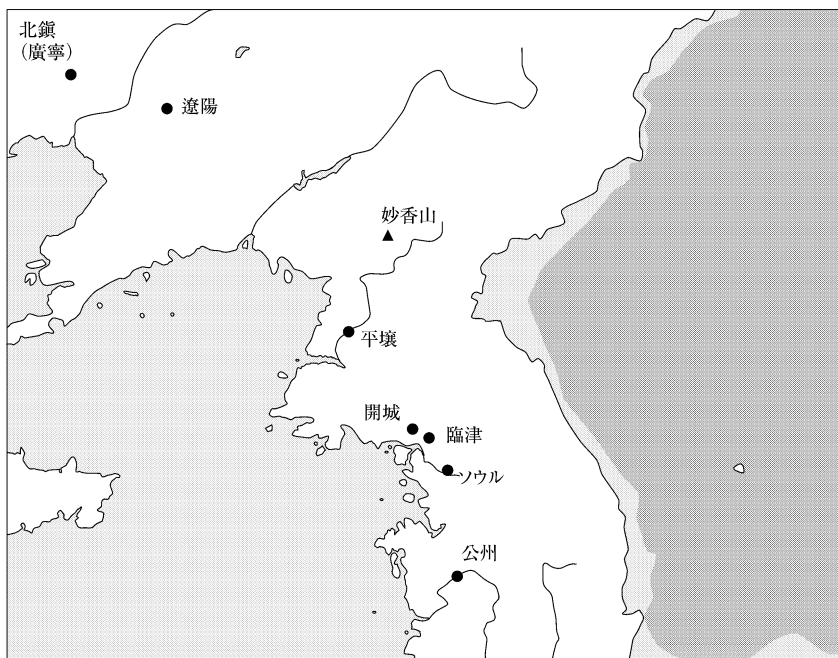
「平壤（南平壤）」とは、すなわち「檀君」が最後に隱遁して山神となった「阿斯達」の地である。『帝王韻紀』の注に引く「本紀」によると、「檀君」は、

朝鮮の域に據りて王と爲る。故に尸羅（新羅）、高禮（高句麗）、南北沃沮、東北扶餘、穢と貊とは、みな檀君の儔（とがら）なり。<sup>(18)</sup>

とあるから、沃沮、扶餘、穢、貊などのツングース系の諸民族は、本來、みな「檀君朝鮮」から枝分かれた存在であり、逆にいうと「檀君朝鮮」の正統を繼いで「平壤」を都（西京）とする高麗は、（その申し立てによれば）沃沮、扶餘、穢、貊などのツングース系の諸民族——具體的には當時の女眞族——に對してこれを支配すべき歴史的な正統性を有していた。<sup>(19)</sup>その正統性に依據して「王氣」を奮い起こすが、いわゆる「平壤（南平壤）」への遷都の最も根本的な動機づけの一つとなっていたのである。

したがって、明の洪武帝から「朝鮮」の國號を賜った朝鮮の太祖（李成桂、改め李旦）が、太祖三年（二三九四）に新王朝の首都を「平壤（南平壤）」の地と目される「漢陽（ソウル）」の地——同じく「阿斯達」と目される「白岳」の南麓——に定めたことは、これも一つには當時の北方情勢に對する潜在的な危機意識の表れとして理解しなければならない。

新王朝成立の最も重要な契機となったのは、いうまでもなく、「鐵嶺」以北の女眞族の領域に對する明朝の「鐵嶺衛」設置計畫という外壓の存在である。<sup>(20)</sup>高麗末の權臣・崔瑩は、この外壓に對して攻遼作戰という軍事力による牽制を試みようとしたが、これに對し、威化島回軍によって崔瑩政權を打倒した新王朝は、あくまでも明朝への「事大主義」を貫徹することによって事態の解決を試みていた。このため、明朝は當初の方針を撤回して洪武二十六年（朝鮮太祖二年、一三九九



参考地図一

三)に「鐵嶺衛」を今日の「鐵嶺」の地に撤退させたが、それはある意味では新王朝の「事大主義」による成果ともいえる（もちろん、新王朝の國王として即位した李成桂、改め太祖李旦が「鐵嶺」以北の女眞族の間に有していた聲望こそが、明朝の政策を軟化させたという側面を輕視することはできないにしても……）。その意味において、中國への「事大主義」を國是とする新王朝が、周の武王から「朝鮮」に封じられた「箕子」の國の繼承を掲げ、「朝鮮」の國號を明朝に奏請したことは最も時宜に適していた。

しかしその一方で、新王朝は「平壤（南平壤）」への遷都を斷行し、「平壤（南平壤）」の「王氣」によって對外的な危機を克服する意圖も併せ持っていたが、このような風水思想に基づく遷都運動は、一般に、檀君が「山神」となって隠れた「阿斯達」の地を求め、その地に王都を遷すことによって實現するという形式を取っていたのである。

そもそも、新王朝が「箕子朝鮮」の繼承を謳っている以上、その首都は本來なら樂浪郡の故地である

「平壤」の地に置かれなければならなかったはずである。しかし、「平壤」に都を置いて「朝鮮」を開いた「檀君」が、その後、「箕子」の東来によってその都を「藏唐京」に移し、最後は「阿斯達」に隠れて山神となったように、この「平壤」の地は「王氣」の盛衰によって本来移動していく性質を持っているのであって、したがって、樂浪郡の故地である「平壤」だけが唯一の「平壤」であったわけではない。

實際、新王朝の首都は、太祖二年（一三九三）の國號の改定を受けて、その翌年（一三九四）に漢陽（ソウル）に定められることになるが、その間には、漢陽とは別に公州の「雞龍山」に「阿斯達」の地、すなわち「平壤（南平壤）」を求めようとする動きもあった。<sup>(22)</sup>

ともあれ、新王朝の首都は太祖四年（一三九四）に漢陽に定められたが、それは「檀君朝鮮」及び「箕子朝鮮」の正統を受け継ぐ國家として、正しく「平壤（南平壤）」の地に置かれていたのである（参考地圖一）。

### 三 もう一つの系譜

「檀君朝鮮」及び「箕子朝鮮」の傳承は、それぞれの都である「平壤」の地と不可分に結びついていた。「平壤」の地は漢代の樂浪郡の郡治であり、西晉末の「永嘉の亂」に乗じて樂浪郡を滅ぼした高句麗の都である。しかし、現在の平壤を「樂浪郡」の故地とする認識は、考古學的な發掘調査を経た今日でこそ常識となっているが、それ以前においては必ずしも絶對的な常識であったとはいえない。文獻のうえでは、むしろさまざまな異説・或説があふれていたのである。

東京遼陽府は、本の朝鮮の地なり。周の武王、箕子の囚を釋き、去りて朝鮮に之くや、因りて以てこれに封ず。……漢初、燕人滿、故の空地に王たり。武帝元封三年（前一〇八）、朝鮮を定め、眞番・臨屯・樂浪・玄菟の四郡と爲す。……晉に、高麗（＝高句麗）に陷る。……元魏の太武、使を遣わして、その居る所の平壤城に至らしむ。遼の東京は、

これに本づく。唐の高宗、高麗を平らげ、ここにおいて安東都護府を置く。後、渤海大氏の有つ所と爲る。……中宗、都する所を賜いて忽汗州と曰い、渤海郡王に封ず。……忽汗州は、即ち故の平壤城なり。中京顯德府と號す。太祖、國を建つるや、渤海を攻めて忽汗城を抜き、その王大諲譔を俘して、以て東丹王國と爲し、太子圖欲を立てて人皇王と爲して以てこれを主らしむ。神冊四年（九一九）、遼陽故城を葺し、渤海・漢戸を以て東平郡を建てて防禦州と爲す。天顯三年（九二八）、東丹國の民を遷してこれに居らしめ、升して南京と爲す（『遼史』卷三十八、地理志二、東京道、東京遼陽府條<sup>(24)</sup>）。

右の『遼史』の記述は、もちろん、今日から見ればほとんど支離滅裂といわなければならぬ。東京遼陽府（今日の遼寧省遼陽）が「本の朝鮮の地」であるかどうかは暫く措くとしても、それが北魏（元魏）の使者が訪問した高麗（＝高句麗）の「平壤城」の地であるといい、また渤海が都を置いた忽汗州こそが「即ち故の平壤城」であるというのは、地理的記述として見れば、前後矛盾して全く一貫性がない。ただし、先學もすでに指摘するとおり、それを人的集團の移動・遷徙の記述として捉えた場合、遼代の東京遼陽府と高麗（＝高句麗）の平壤城、及び渤海の忽汗州・忽汗城は、それぞれ密接に連關する<sup>(25)</sup>。

具體的には、まず高句麗の滅亡に伴ってその遺民の一部が遼西回廊の營州附近に遷され、次にその遺民たちは大祚榮の叛亂に従って遼西回廊の營州から牡丹江上流の忽汗州（吉林省敦化）に移動し、その後、中流の忽汗城（黒龍江省寧安の東京城）に移動した。そうして最後に渤海を滅ぼした遼（契丹）が、渤海の遺民である東丹國の民を遼陽に移してこれを「南京（後に東京）」としたのである。したがって、高句麗の平壤城、遼西回廊の營州、牡丹江流域の忽汗州、及び忽汗城、そして遼代の東京遼陽府へと、それぞれ時を経て移住していった高句麗系・渤海系の遺民たちは、それぞれの地において自らの民族的傳統を回顧し、その時その時の現住地に、かつての民族の榮光を象徴する「平壤城」のイメージを――さら

には「平壤城」に連なる「箕子朝鮮」のイメージをも——重ね合わせるものがあつたのであろう。だからこそ、『遼史』地理志においては、「東京遼陽府は、本の朝鮮（＝箕子朝鮮）の地なり」と斷言されているのである。

このように、人的集團の移動・遷徙に伴つて、その人的集團が抱いている歴史的傳承や地理的觀念が——さらには地名そのものが——移動していくという捉え方は、『遼史』地理志を読み解く際に最も重要な鍵となる概念であるが、これと同じ發想は、「箕子朝鮮」をめぐる他の様々な傳承についても應用することができであろう。

たとえば『隋書』卷六十七、裴矩傳に見える「孤竹國」の傳承は、それ自體、矛盾したものではあつても、その背後にはある種の論理の一貫性を捉えることができる。

帝（煬帝）の塞北に巡りて啓民の帳に幸するに從う。時に高麗（＝高句麗）、使を遣わして、先に突厥に通ず。啓民敢えて隱さず、これを引きて帝に見す。矩、因りて奏狀して曰く、「高麗の地は、本の孤竹國なり。周代、これを以て箕子に封じ、漢世、分けて三郡（＝遼東・樂浪・玄菟）と爲し、晉氏はまた遼東に統ぶ。今すなわち臣たらず、別れて外域と爲る。……陛下の時に當たりて、安んぞ事とせず、この冠帶の境をして、仍りて蠻貊の郷たらしむるを得んや……」と（『隋書』卷六十七、裴矩傳<sup>(26)</sup>）。

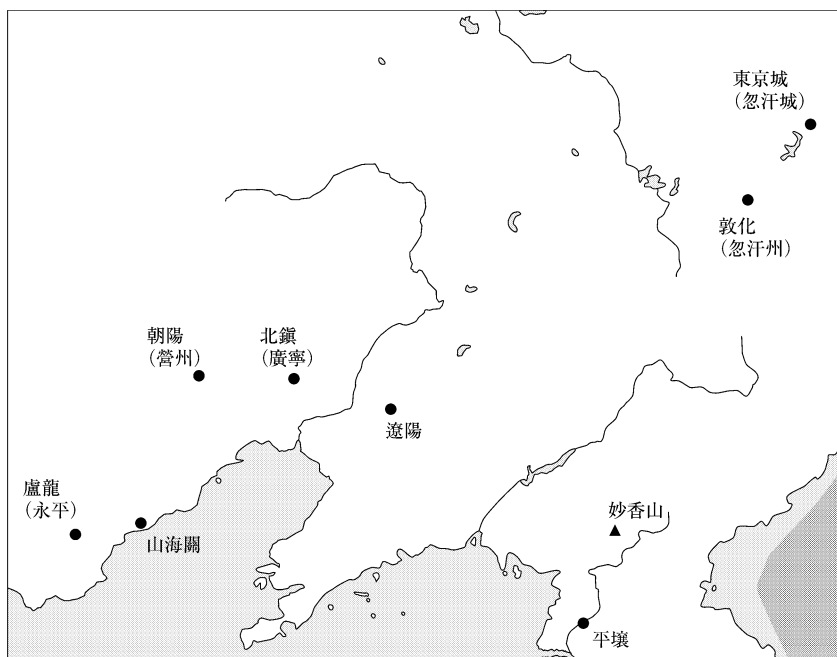
右の裴矩傳の記述によれば、高麗（＝高句麗）の地は、「本の孤竹國」であるというが、伯夷・叔齊の故事で有名な「孤竹國」の所在は、一般に、明清時代の永平府、今日の河北省盧龍とされているから、これを高麗（＝高句麗）の故地とすることはできない。言うまでもなく、高句麗の領土はその最盛期においても遼河以西に伸びることはなかったのである。しかし、高麗（＝高句麗）と孤竹國との間に「樂浪郡」という媒介項を設定すれば、この兩者の結合にもそれなりの論理は内在していることに氣がつくであろう。

前漢代に創設された樂浪郡は、その後、後漢末に公孫氏が遼東に自立して平州牧を自稱するとその管内に入り、曹魏の代には平州が幽州に併合されることもあったが、西晉・武帝の咸寧二年（二七六）に再び遼東（襄平）を州治として平州が設置され、樂浪郡は昌黎郡、遼東國、玄菟郡、帶方郡とともに平州の管内に入ったのである。<sup>(28)</sup>

ところが、西晉末、永嘉の亂によつて中原との連絡を立たれた樂浪郡の漢人勢力は、當時、樂浪郡（及び帶方郡）に割據していた遼東の張統、及び樂浪の王遵らに率いられて平州の慕容廆に歸順し、慕容廆はこれを受け入れて平州管内に「樂浪郡」を僑置した。<sup>(29)</sup> 樂浪の王氏は樂浪郡の代表的な漢人豪族であり、慕容廆はすなわち前燕の事實上の創建者である。

その後、朝鮮半島の樂浪郡は高句麗の南侵によつて淪没したが、一方、樂浪郡（僑郡）を統轄した平州の慕容氏の勢力は、慕容廆の子の慕容皝の代に燕王と稱して和龍城（朝陽）に都し、慕容皝の子の慕容儁の代に大燕皇帝と稱して鄴に都した。次いで、前燕は前秦によつて滅ぼされ、前秦から獨立した後燕及び北燕は北魏によつて滅ぼされる。この間、慕容氏に歸順した「樂浪郡」の遺民たち——漢人、及び「朝鮮」の民——の消息は明らかでないが、延和元年（四三三）に北燕の都（和龍）を攻略した北魏の太武帝は、「營丘、成周、遼東、樂浪、帶方、玄菟」の六郡の民三萬家を幽州に徙した<sup>(30)</sup>というから、おおむね慕容政權の展開に従つて主として遼西回廊の和龍城（朝陽）方面に移住していたのであろう。<sup>(31)</sup>

『魏書』卷一百六上、地形志上、營州の項の記述によると、和龍城（朝陽）に治所を置いた北魏時代の「營州」の管内には、正光年間（五二〇～五二五）の末に復置された「樂良郡（＝樂浪郡）」、及びその領縣である「帶方縣」が存在し、また肥如城（河北省盧龍の北方）に治所を置いた「平州」の管内には、北平郡の領縣である「朝鮮縣」が存在した。これは樂浪郡の管内の「朝鮮縣」の民を、延和元年——すなわち太武帝による和龍攻略の年——に平州の治所である肥如城に移して復置したものであるという。<sup>(33)</sup> さらに、北魏末の六鎮の亂、及びその混亂の中で起こった就德興の叛亂によつて高昌年間（五二五～五二七）に營州が淪没すると、これを受けて永熙二年（五三三）に營州（南營州）は英雄城（河北省保定の北方）に僑置されたが、その管内には東魏の天平四年（五三七）に設置された「樂良郡（＝樂浪郡）」、及び營丘郡の領縣として元象



参考地圖二

年間(五三八～五三九)に設置された「帶方縣」などが存在した。<sup>(35)</sup>

このように、北魏時代に遼西回廊を管轄した「營州」及び「平州」の管内には、「樂浪郡」及び「朝鮮縣」、「帶方縣」などの民が僑置されていたことが確認できる。もちろん、それを西晉末に慕容氏に歸順した「樂浪郡」の遺民たちと單純に結びつけることはできないにしても、少なくとも、それが何らかの意味で「樂浪郡」の系譜を引く漢人(ないし「朝鮮」人)の勢力の據點として意識されていたことは確實である。<sup>(36)</sup>

一方、『史記』の周本紀(及び伯夷傳)の注に引く「括地志」(唐・李泰撰)によると、伯夷・叔齊の故事で有名な「孤竹國」は、「盧龍縣の南十二里」に存在したといわれている。<sup>(37)</sup>したがって、唐代の「平州(盧龍)」の地には、これを殷代の「孤竹國」であるとする傳承と、「平州」に僑置された「朝鮮」の民が傳える「樂浪郡」の傳承とが並存していた可能性が高い。實際、『大明一統志』卷五、永平府の



項の記述によると、永平府は古の「孤竹國」であり、北燕の時代には「平州」及び「樂浪郡」が置かれたとあるし、府城の西一十五里には孤竹國君の所封の地が存し、かつ府の境内には箕子の受封の地と稱する「朝鮮城」の古蹟が存在したといふことになっている<sup>(38)</sup>。

このように、西晉末の「永嘉の亂」以後の「樂浪郡」の遷徙の歴史を振り返ってみると、遼西回廊に移住した「樂浪郡」の漢人（ないし「朝鮮」人）のなかには、自らのアイデンティティーを樂浪郡、及び樂浪郡に繋がる箕子の傳承と結びつけ、その傳承の舞臺をかれらの遷徙の地である遼西回廊の「樂浪郡」に移し替えて、これを後世に語り継いでいったものも必ずや存在していたのではないかと考えられる。

高麗（＝高句麗）の都は「樂浪郡」の故地であるが、その「樂浪郡」は遼西回廊にも僑郡として存在し、これを「孤竹國」の故地とされる「平州」が管轄した。このため「樂浪郡」の傳承を媒介項として、「孤竹國」の傳承の地である「平州」がまず「樂浪郡（僑郡）」と混線し、この「樂浪郡（僑郡）」と樂浪郡の故地の平壤に都を置いた「高麗（＝高句麗）」とが混線した結果として、裴矩傳のように「高麗の地は、本の孤竹國なり」とする傳承が生まれることになったのである<sup>(39)</sup>。

もちろん、それは單なる傳承の「混線」にすぎない。しかしこの「混線」の記録が、たまさか中國の正史に残されたことによつて、それは近世朝鮮時代にさらに大きな「混線」を生み出すことになるのである（参考地圖二）。

#### 四 古朝鮮認識の擴大

「樂浪郡」の遺民が遼東及び遼西方面に「僑郡」の民として存続し、また「高句麗」の遺民が遼東及び遼西方面に「渤海人」として存続したことは、それぞれ朝鮮半島に展開した「三韓」の歴史とは別個の章を構成する。一方、高句麗の南進による「樂浪郡」の滅亡は、やがて朝鮮半島南部における「三韓」の國家形成を促し、この「三韓」——馬韓・弁韓・

辰韓（後に「高句麗」を含む）——の抗争のなから生み出された「韓民族（朝鮮民族）」は、その後、支配領域を北方へと擴大していく過程で、再び遼東方面における「朝鮮」の存在を「発見」することになった。

高麗・朝鮮の民が「鴨綠江」を越えて遼東方面に移住したことは、その比較的早い事例としては、遼（契丹）に鹵獲された「三韓」の民が、遼の中京大定府の北方の「三韓縣」に遷されたことに始まっているが、<sup>(40)</sup>その後モンゴル族の高麗への侵攻に伴って、高麗から離叛した邊境の人民は遼東方面に大量に流亡し、遼陽に附置された東寧府（東寧衛）を據點に、さながら高麗人のコロニーを形成した。<sup>(41)</sup>明代の遼東にも依然として多數の朝鮮人（高麗人）が居住していたことは、たとえば崔溥の『漂海錄』にも次のように記録されている。

僧戒勉なる者あり、能く我が國の語音に通ず。臣に謂いて曰く、「僧は本の朝鮮の人に係る。僧の祖父、逃れてここに来たり、今すでに三世たり。この方は、地は本國の界に近し。故に本國の人の來住する者はなほだ夥し。……此の方は、即ち古の我が高句麗の都たり、奪われて中國に屬すること、千有餘載。我が高句麗の流風遺俗は、なお未だ殄きざるあり……」と（『漂海錄』卷三、弘治元年五月二十四日條<sup>(42)</sup>）。

僧の戒勉なる者が崔溥に面晤を求めたのは、たまたま明の弘治帝による僧侶の還俗政策によって行き所を失ったかれが、朝鮮との縁故を頼って祖父の故國に移住し、身の安逸を圖ろうとしたものにすぎない。この點を見透かした崔溥は戒勉の懇請を適當にあしらっているが、ともあれ、ここで注目しておかなければならないのは、戒勉が遼東に居住する自らのアイデンティティーを「我が高句麗」に求め、その地が「奪われて中國に屬すること、千有餘載」であっても、依然として「我が高句麗の流風遺俗は、なお未だ殄きざるあり」と語っているという事實である。同じように、崔溥もまた「遼東は、即ち舊の我が高句麗の都」であるといひ、<sup>(43)</sup>「海州・遼東等の處の人は、半ばはこれ中國、半ばはこれ我國、半ばはこれ女

眞」であると言っているが、このことは、當時の朝鮮の人々が遼東方面に居住する朝鮮人（高麗人）の歴史を「高句麗」に結びつけ、高句麗以来、その地に一貫して朝鮮の人々が居住したと理解していたことを意味している。

もちろん、それは歴史的に言えば正確な理解ではない。朝鮮人（高麗人）の遼東方面への流亡が本格化したのは、前述のとおり、直接には十三世紀におけるモンゴルの侵攻に始まっている。もちろんそれ以前にも、高句麗の滅亡の際には大量の高句麗人が遼西方面に遷されていたし、また唐朝の安東都護府が高句麗の故都（平壤）から遼東城（遼陽）に撤退した際にも、高句麗遺民の一部はこれに伴って遼東方面に移住していたにちがいない。しかし、遼東・遼西に移住した高句麗の遺民は、その後、渤海の建國・滅亡を経て遼東の「渤海人」として独自の歴史を刻んでゆくのであって、この遼東の在來の渤海人と、十三世紀以降に新規に流亡していった朝鮮人（高麗人）とを單純に同一視することはできない。<sup>(45)</sup>

とはいえ、當時の人々にとっては「高句麗」と「高麗」の區別それ自體が極めて曖昧であり、兩者はしばしば同じものとして混一されていた。したがって、近世における遼東方面の朝鮮人（高麗人）の存在を、古代において遼東方面を支配した高句麗の歴史——さらに遡っては「箕子朝鮮」の歴史——に結びつけて理解することは、當時の朝鮮の人々にとってはむしろ必然的な「誤解」であつたといわなければならない。

たとえば、明末に朝貢使節として遼東を旅した尹根壽は、その隨筆「月汀漫筆」のなかに次のような見聞を記している。

廣寧城の北、五里ばかりに、箕子の井あり。傍近に、もと箕子の廟あり。箕子の方巾を戴くの塑像あり。嘉靖の間、獺子（モンゴル）の焼く所となり、今は廢る。<sup>(46)</sup> 廣寧は箕子の封内にあり。また箕子の此の地に留駐して而ち井及び廟あるなからんか。

つまり、廣寧城（遼寧省北鎮）は「箕子朝鮮」の領域内にあつたから、たまたま箕子がこの地に巡行した際に「井」及

び「廟」を残したのであろうかと當て推量をしているのである。朝鮮人である尹根壽は、もちろん箕子の都は朝鮮半島の「平壤」であると思ひ込んでいたが、その一方で廣寧城にも「箕子朝鮮」の傳承を「發見」すると、かれはこれを「箕子の巡行」という觀點から合理化しようとしたのであろう。

次に、清の乾隆四十五年（朝鮮正祖四年、一七八〇）、清朝への朝貢使節團の一員として實地に遼東の地を旅した朴趾源は、その名著『熱河日記』のなかで、遼東の各地に傳わる「平壤」の傳承を「箕子朝鮮」に結びつけて、あらまし次のように述べている。

『唐書』裴矩傳に、「高麗は本の孤竹國で、周はこの地に箕子を封じ、漢はこの地を四郡に分けた」とある。いわゆる「孤竹」の地は、今の永平府に位置する。また廣寧縣には、もと箕子廟があり、殷代の冠（冕冠）を戴いた塑像があったが、皇明の嘉靖年間に、兵火に焼けてしまった。この廣寧のことを、人は或いは平壤と稱している。『金史』及び『文獻通考』には、「廣寧・咸平は、皆箕子の封地である」と書かれている。これを以て推量するに、永平・廣寧の間は、一つの平壤の地である。『遼史』に「渤海顯德府はもとの朝鮮である。箕子が封じられた平壤城は、遼が渤海を破ると、改めて東京と爲した」とある。即ち今の遼陽縣がそれである。これを以て推量するに、遼陽縣は一つの平壤の地である。愚考するに、箕子は初め永平・廣寧の間にあつたが、その後、燕の部將秦開に驅逐され、二千里の地を喪失して段々と東に遷徙していった。ちょうど中國の晉朝や宋朝が江南に渡つたようなものである。その際、寄留したところは、みな平壤と稱したのであつて、今の我が大同江のほとりの平壤は、即ちその一つにすぎない。<sup>(47)</sup>

この朴趾源の議論は、その根底において中國の史書に散見する「箕子朝鮮」の記述——「朝鮮」が遼西及び遼東に存在したとする記述——を踏まえているために、一見すると充分な説得力があつた。もちろん、それは「樂浪郡」及び「高句

麗」の遺民の遷徙によって、それぞれの遷徙の地に形成された後世の傳承にすぎない。しかし、それを史實として認識した朴趾源は、これを「箕子の東遷」という觀點によって統一的に再構成しようとしたのである。

さらに、朴趾源よりやや後の人で、朝鮮正祖朝に奎章閣の檢書官であつた李圭景は、その著『五洲衍文長箋散稿』卷四十六、三韓有二辨證説の項で、明・顧炎武の「三韓」に關する考證を引用して、次のように述べる（最初は顧炎武の説、次が李圭景の反駁である）。

今人、遼東を謂いて三韓と爲す者は、これを『書』序に考うるに……。今人、すなわち遼東を謂いて三韓と爲す。これ内地を以てこれを目して外國と爲すなり。その故を原ぬるに、天啓の初、遼陽を失して以後の章奏の文に本づきて、遂に遼人を謂いて三韓と爲す者あり。これを外にするなり。今、遼人乃ちこれを以て自稱するは、それまた自ら外にするのみ（『日知錄』卷二十九、三韓<sup>(48)</sup>）。

亭林（顧炎武）の論は然りといえども、遼東はすなわち燕の幅員なり。一事の疑うべき者あり。漢・王符の『潜夫論』に、「昔、周の宣王の時、また韓侯あり。その國は燕に近し。故に『詩』に云えらく、『昔<sup>おも</sup>いなる彼の韓の城は、燕の師の完<sup>つく</sup>る所なり』と。その後、韓西（朝鮮？）もまた韓を姓とす。衛滿の伐つ所となり、海中に遷居す」と云う。その説を夷考するに、すなわち箕子の後の箕準、燕人衛滿の逐う所と爲り、海に浮かびて南して馬韓と爲る。すなわち恐らくは「これを」指して言を爲すなり。

『燕史』に、『詩』に云えらく、『それ追それ貊』と。燕師の北國なり。韓は燕の北にあり、貊は韓の北國たり。韓すでに燕に歸し、韓、從いて東徙す。漢初、これを『三韓』と謂う」とあり。その指歸する所、また箕氏に似たり。すなわち意うに、箕準の南遷して韓と稱するの前、その朝鮮の地に在りて、また韓の名あり。而してその時、遼東

西（遼東・遼西）は、盡く朝鮮の地たり。則ち從いて韓と稱するは、これ異事ならず。世代嬗りて地名遽かに變ずといへども、しかも舊名を冒稱するは、また怪と爲すに足らず。……遼東の三韓と稱する者は、何ぞこれに異ならんや。韓と稱するの緣起を深究するに、恐らくはかくのごときのみ。<sup>(49)</sup>

顧炎武は遼東を「三韓」と稱することが、「天啓の初、遼陽を失して以後の章奏の文に本づく」と考え、それは「内地を目して外國と爲す」ものであるとして批判した。しかし、それは顧炎武の失考であつて、實際には明代の中頃からすでに遼東の雅稱としての「三韓」の用例が存在する。<sup>(50)</sup>ところが李圭景は、その用例をさらに上代に遡らせて、そもそも「箕子朝鮮」が「遼東」を支配していた頃、すでに「箕子朝鮮」を指してこれを「韓」と呼ぶ用例があつたのである。

もつともこの李圭景の議論は、その根據とする『潛夫論』や『燕史』の解釋それ自體が恣意的であつて、必ずしも信を置くことはできない。なるほど、『潛夫論』及び『三國志』卷三十、魏志、東夷、韓傳の注に引用する『魏略』の記述によると、後漢末の「朝鮮（『樂浪郡』）」に「韓氏」と稱する漢人（もしくは「朝鮮」人）の豪族が存在したことは確かであろう。<sup>(51)</sup>しかし、それが『詩經』大雅、蕩之什、韓奕に見える「韓侯」の後裔であるという證據はない。一方、『燕史』（明・郭造卿撰）<sup>(52)</sup>は燕の北方にあつた「韓」が燕に歸順し、やがて東方に遷徙して「三韓」になつたと説くが、これは『詩經』及び『潛夫論』、『魏略』の記述に基づく附會の説にすぎないであろう。したがって、李圭景のように「箕子朝鮮」の地が古より「韓」と呼ばれていたとすることはできない。<sup>(53)</sup>

それでも、現に遼東方面には多數の朝鮮人（高麗人）が居住し、また中國の史書には「遼西」及び「遼東」方面に「朝鮮（『箕子朝鮮』）」が存在したことが記録されていた。そうして現に明末清初の中國の人々は、遼東のことをその雅稱としては「三韓」と呼んでいたのである。

これらの事實は近世朝鮮時代の人々に、自ずから「遼東西は、盡く朝鮮（『箕子朝鮮』）の地」であるという認識を抱か

せることになったし、さらに、（ここでは直接の言及はないにしても）箕子朝鮮に國を譲った「檀君朝鮮」が、「尸羅（新羅）、高麗（高句麗）、南北沃沮、東北扶餘、穢と貊」などの共通の始祖として遼東・遼西を支配したこと（の證據として受け止められることになった）。

かくして遼東・遼西の一帯に廣がった「箕子朝鮮」の領域のイメージは、さらに民族の獨自の起源としての「檀君朝鮮」の領域のイメージに重ね合わせられ、遼東・遼西、及び朝鮮半島を包みこんだ「古朝鮮」の領域のイメージが固められていったのである。

## おわりに

いわゆる「箕子朝鮮」の領域は——前近代の朝鮮の人々の理解によれば——次に引用する『三國志』魏書所引の『魏略』の記述を一つの根據として、遼東・遼西の全域に及ぶものと見做されていた。

昔、箕子の後の朝鮮侯、周の衰うるや、燕の自ら尊んで王と爲り、東のかた地を略せんと欲するを見、朝鮮侯もまた自ら稱して王と爲り、兵を興して、燕を逆撃して以て周室を尊ばんと欲す。その大夫禮、これを諫む。すなわち止めて、禮をして西のかた燕に説かしむ。燕これを止めて攻めず。後、子孫稍く驕虐たり、燕すなわち將の秦開を遣はして、その西方を攻めしめ、地を取るに二千餘里、滿番汗に至りて界と爲す。朝鮮遂に弱し。<sup>(54)</sup>

「朝鮮」の領域は戰國時代の「燕」に隣接した、したがって、それは遼東・遼西の全域に及ぶ、と見做されていたわけである。その當否はともかく、現に中國の史書には「高麗の地は、本の孤竹國なり。周代、これを以て箕子に封じ、……」（『隋書』卷六十七、裴矩傳）といい、「遼東は、本、周の箕子の國」（『新唐書』卷九十一、溫彥博傳）といい、「東京遼陽

府は、本の朝鮮の地なり」(『遼史』卷三十八、地理志二、東京道、東京遼陽府)と書かれていたし、また明代の永平府(現在の河北省盧龍)の境内には「箕子受封の地」と稱する「朝鮮城」の古蹟が存し(『大明一統志』卷五、永平府)、同じく明代の廣寧城の境内には「箕子の井」、「箕子の廟」などの古蹟の存在が語り繼がれていた(尹根壽「月汀漫筆」)。

これらはいずれも地名の沿革(州治の移動)に伴う「誤解」、ないしは傳承の「混線」にすぎないのであるが、ともかくこれらの史傳に接した前近代の朝鮮の人々は、これらを素直に史實として受け止め、すなわち「箕子朝鮮」(及び「檀君朝鮮」)の領域が、遼東・遼西の一帯にまで廣がっていたことを確信した。

もちろん、朝鮮の人々は箕子朝鮮の都が「平壤」に存することを信じて疑わなかったが、その一方では中國の信賴すべき史書に記述された「遼東」及び「遼西」方面の「朝鮮」の傳承を無視することもできない。そこで朴趾源や李圭景のよう

に、近世朝鮮時代の人々は「箕子朝鮮の東遷」という論理を生み出していったのである。けれども事實はその反對に、箕子朝鮮の「傳承」の方こそが朝鮮半島の「平壤」の地から遼東・遼西方面へと「西遷」していったのであろう。そうしてそれは、後世、朝鮮半島の「平壤」がもう一つの「平壤(≡南平壤)」として南方に遷徙していったことと、あたかも好一對をなしていたのである。

## 【附記】

本稿は草卒の間に思いつきを書き並べた蕪雜な隨想にすぎない。その論旨や引證した資料も多くは先學の業績を越えるものではないが、筆者としては前近代の史實に關する「傳承」が、人々の「移動」に伴って、その傳承の舞臺となる「地名」ごと移動していくという現象に特に焦點を絞って論旨をまとめてみたかったのである。

もちろん、この點についても諸先學の研究はつとに明敏な指摘を行っている。参照すべき代表的な文獻として、ここでは次の四點を擧げておこう。



稻葉岩吉『滿洲發達史』（一九一五年、東京、大阪屋號出版部）  
 今西龍『朝鮮古史の研究』（復刻本、一九七〇年、東京、國書刊行會）  
 韓永愚『朝鮮後期史學史研究』（一九八九年、ソウル、一志社）  
 金翰奎『遼東史』（二〇〇四年、ソウル、文學と知性社）

なお金翰奎氏の著作には、遼東を舞臺とする諸民族——もちろん、「韓民族（朝鮮民族）」もそこに含まれている——の歴史に關する詳細な文獻リストが附されていることを申し添えておきたい。

（このほか、本稿脱稿後に次の論考についても示教を得た。平木實「國號「朝鮮」の名稱に關する思想史的考察」（『朝鮮社會文化史研究Ⅱ』所收、二〇〇一年、京都、阿吽社）。併せて參照を請う。）

## 註

（1）拙稿「朝鮮前近代における民族意識の展開——三韓から大韓帝國まで」（『中國東アジア外交交流史の研究』夫馬進編、二〇〇七年三月、京都、京都大學學術出版會）。

（2）『春秋穀梁傳』昭公十二年冬十月條。晉伐鮮虞。其曰晉狄之也。其狄之、何也。不正其與夷狄交伐中國、故狄稱之也。范寧集解。鮮虞、姬姓白狄也。地居中山、故曰中國。夷狄、謂楚也。／『春秋左氏傳』昭公十二年冬十月條。晉伐鮮虞。孔穎達疏。正義曰、……賈服取以爲說、「左氏無貶中國從夷狄之法、……鮮虞、夷狄也。近居中山、不式王命、不共諸夏、不事盟主。伐而取之、唯恐知力不足。焉有以夏討夷、反狄中國。從此以後、用師多矣。何以不常狄晉、

更復書其將也。」杜（杜預）以其言不通、故顯而異之。／『史記』卷四十三、趙世家第十三。（獻侯）十年、中山武公初立。司馬貞索隱。按、中山、古鮮虞國。姬姓也。

（3）前掲拙稿、參照。

（4）『朝鮮王朝實錄』太祖元年十一月丙午條。遣藝文館學士韓尙質、如京師、以朝鮮・和寧、請更國號。奏曰、「陪臣趙琳、回自京師、欽齋到禮部咨、欽奉聖旨、節該、「高麗果能順天道、合人心、以安東夷之民、不生邊釁、則使命往來、實彼國之福也。文書到日、國更何號、星馳來報。」欽此。竊念、小邦王氏之裔珞、昏迷不道、自底於亡、一國臣民、推戴臣權監國事。驚惶戰栗、措躬無地間、欽蒙聖慈、

許臣權知國事、仍問國號。臣與國人、感喜尤切。臣竊思惟、有國立號、誠非小臣所敢擅便。謹將朝鮮・和寧等號、聞達天聰、伏望取自聖裁。」

- (5) 『朝鮮王朝實錄』太祖二年二月庚寅條。奏聞使韓尙質、來傳禮部咨。上向帝闕、行謝恩禮。其咨曰、「本部右侍郎張智等、於洪武二十五年閏十二月初九日、欽奉聖旨、『東夷之號、惟朝鮮之稱美、且其來遠、可以本其名而祖之。體天牧民、永昌後嗣。』欽此。本部今將聖旨事意、備云前去。」

- (6) 『新增東國輿地勝覽』卷四十八、咸鏡道、永興大都護府の項、參照。なお、母方の實家で誕生することは、廣く「男歸女家」の婚姻習俗が行われていた當時の朝鮮では一般的な事柄である。

- (7) 『朝鮮王朝實錄』太祖元年八月庚申條。禮曹典書趙璞等上書曰、「……朝鮮檀君、東方始受命之主。箕子、始興教化之君。令平壤府、以時致祭。……」

- (8) 『漢書』卷二十八下、地理志下、燕。……玄菟・樂浪、武帝時置。皆朝鮮・濊貊・句驪蠻夷。殷道衰、箕子去之朝鮮、教其民以禮義・田蠶・織作。樂浪・朝鮮民、犯禁八條。相殺以當時償殺。相傷以穀償。相盜者、男沒入爲其家奴、女子爲婢。欲自贖者、人五十萬。雖免爲民、俗猶羞之。嫁取無所讎。是以其民終不相盜、無門戶之閉、婦人貞信不淫辟。其田民飲食以籩豆、都邑頗放效吏及內郡賈人、往往以杯器食。郡初取吏於遼東、吏見民無閉賊、及賈人往者、夜則爲盜、俗稍益薄。今於犯禁咎多、至六十餘條。可貴哉、

仁賢之化也。

- (9) 今西龍「檀君考」(『朝鮮古史の研究』復刻本、一九七〇年、東京、國書刊行會、所收)、參照。

- (10) 『三國遺事』卷一、紀異第一、古朝鮮。……號曰檀君王儉。以唐(高)(堯)卽位五十年庚寅(唐堯卽位元年戊辰、則五十年丁巳。非庚寅也。疑其未實、都平壤城(今西京、始稱朝鮮。又移都於白岳山(阿斯達。又名弓「作方」忽山。又今彌達)、御國一千五百年。周虎王(武王)卽位己卯、封箕子於朝鮮。檀君乃移於藏唐京。後還隱於阿斯達爲山神。壽一千九百八歲。「」は原註。以下同じ。

- (11) 「九月山」説については、『朝鮮王朝實錄』魯山君(端宗)卽位年六月己丑條、慶昌府尹李先齊上書に次のように見える。／……今修史草、至戊申(世宗十年、一四二八)、有右議政致仕柳觀上書曰、『文化縣、臣之本郷。父老云、九月山、是縣之主山。在檀君時、名阿斯達山。山之東嶺、高大邈迤。其山之腰、有神堂、不知創於何代。北壁有檀因天王、東壁有檀雄天王、西壁有檀君天王。縣人稱之曰三聖堂。其山下人居、亦稱曰聖堂里。堂之內外、鳥鵲不栖、麋鹿不入。檀君入阿斯達山爲神。此山之下三聖堂、至今猶存。其迹可見。縣之東有地名、曰藏唐京。父老傳以爲檀君之都。或者以爲、檀君、初都王儉城。今宜合在箕子廟。蓋檀君與堯竝立、至箕子、千有餘歲。豈宜下合於箕子之廟歟。』

- (12) 『高麗史』卷二十三、高宗世家、二十一年七月甲子條。遣內侍李白全、奉安御衣于南京假闕。有僧據識云、「自扶疎山、分爲左蘇、曰阿思達。是古楊州之地。若於此地、營

宮闕而御之、則國祚可延八百年。」故有是命。／ちなみに、扶疎山（扶蘇山）とは、高麗の首都・開京の鎮山である松岳を指す。

(13) 今日のソウルの地を「平壤（南平壤）」と呼ぶことは、一般には高句麗時代からの慣例とされる。しかし私見によれば、それは統一新羅時代に「三韓」を統一する立場から新たに創出された言説にすぎない。前掲拙稿、参照。

(14) 池内宏「完顔氏の曷懶経略と尹瓘の九城の役」（『滿鮮史研究』中世第二冊。初版、一九三七年、東京、座右之寶。三版、一九七九年、東京、吉川弘文館）。

(15) 『高麗史』卷二十三、高宗世家、二十年五月條。西京人畢賢甫、洪福源等、殺宣諭使・大將軍鄭穀、朴祿全、舉城叛。／同、十二月條。崔瑀遣家兵三千、與北界兵馬使閔曦討之。獲賢甫、送京、腰斬于市。福源逃入蒙古。擒其父大純、弟百壽、及其女子。悉徙餘民於海島。西京遂爲丘墟。

(16) 『高麗史』卷三十九、恭愍王世家、五年十二月條。修葺南京宮闕。／同、六年正月甲辰條。以營南京宮闕、除楊廣道今年屯田。／同、二月己酉條。命李齊賢、相宅于漢陽、築宮闕。

(17) 『高麗史』卷三十九、恭愍王世家、九年七月乙卯朔條。幸白岳、相視遷都之地。白岳在臨津縣北五里。／同、辛未條。始營白岳宮闕。先是、欲遷都南京、遣前漢陽尹李安、修其城闕。民甚苦之。卜于太廟、不吉。又興是役。時人謂之「新京」。／同、十一月辛酉條。移御白岳新宮。／『世宗實錄地理志』京畿、楊州都護府、臨津縣。……宮城舊址。

「在縣北五里、白岳山南。周回七百二十七步。恭愍王己亥（恭愍王八年、一三五九）、始創。辛丑（恭愍王十年、一三六一）、紅頭之亂、毀都盡。至今號爲「新京」。／ただし、『新京』の始創は『高麗史』では恭愍王九年（一三六〇）に繫年する。

(18) 『帝王韻紀』（高麗・李承休撰）卷下。初誰開國啓風雲。釋帝之孫名檀君。「本紀曰、上帝桓因、有庶子曰雄。云云。謂曰、下至三危・太白、弘益人開敷。故雄受天符印三箇、率鬼三千、而降太白山頂神檀樹下。是謂檀雄大王也。云云。令孫女飲藥成人身、與檀樹神婚而生男、名檀君。據朝鮮之域爲王、故尸羅、高禮、南北（浞）〔沃〕沮、東北扶餘、穢與貊、皆檀君之（壽）〔儔〕也。」

(19) 「檀君神話」の主要モチーフ、すなわち「朝鮮」の始祖がツングース系諸民族を従えて「東方」に君臨するというモチーフは、建國以來、「三韓（高句麗・百濟・新羅）」の領域を統一支配するとの觀念を抱いていた高麗の人々が、現實世界において屈服を餘儀なくされた金朝（女真族）に對し、「高句麗」の繼承意識に基づく歴史的・文化的な優越意識——いわゆる「反女真意識」——を展開させていた事實と、恐らくは相表裏する關係にあったと考えられる。「檀君朝鮮」の傳承は、從來、一般に説かれているような「モンゴル族の侵攻に對する民族的な抵抗意識」が生み出したものというよりは、むしろ高麗前期、とりわけ仁宗朝の前後に顯著に認められる「反女真意識」、及びそれと相表裏する「三韓」の統一者としての自尊意識こそが生み出

した傳承であると言わなければならない。

- (20) 末松保和「麗末鮮初に於ける對明關係」(『高麗朝史と朝鮮朝史』末松保和朝鮮史著作集5、一九九六年、東京、吉川弘文館)。

- (21) 和田清「明初の滿洲經略」上・下(『東亞史研究』滿洲篇所收、一九五五年、東京、東洋文庫)。

- (22) 『朝鮮王朝實錄』太祖二年正月戊申條。胎室證考使權仲和、還上言、「全羅道珍同縣、相得吉地。」乃獻山水形勢圖、兼獻楊廣道雞龍山都邑地圖。／同、癸丑條。遣三司左僕射權仲和、安胎室于完山府珍同縣。陞其縣爲珍州。敎、「將以今月十八日、幸雞龍山。其令臺省各一員、義興親軍、侍從。」／同、乙丑條。上發松京、欲親見雞龍山形勢、將定都。領三司事安宗源、右侍中金士衡、參贊門下府事李之蘭、判中樞院事南閭等、從之。／同、二月癸未條。至雞龍山下。／同、戊子條。上發雞龍山。留金湊及同知中樞朴永忠、前密直崔七夕、監營新都。／同、壬寅條。至自雞龍山。百官迎于龍屯之野。／同、三月己巳條。定雞龍山新都畿州縣・部曲・鄉・所、凡八十一。／同、十二月壬午條。遣大將軍沈孝生、如雞龍山、罷新都之役。京畿左右道都觀察使河崙上言、「都邑宜在國中。雞龍山、地偏於南、與東西北面相阻。且臣嘗葬臣父、粗聞風水諸書。今聞雞龍之地、山自乾來、水流巽去。是宋朝胡舜臣所謂「水破長生、衰敗立至」之地。不宜建都。」上命進書、令判門下府事權仲和、判三司事鄭道傳、判中樞院事南在等、與崙參考、且覆驗前朝諸山陵吉凶以聞。於是、以奉常寺「諸山陵形止案」山水來去、

考之、吉凶皆契。乃命孝生、罷新都之役。中外大悅。胡氏之書、自此始行。上命以前朝書雲觀所藏祕錄文書、盡授崙考閱、更覽遷都之地、以聞。／ちなみに、新王朝がその首都を朝鮮半島中部の公州に遷そうとしたことは、これも當時の北方情勢を踏まえた軍事的な意圖(戰略的後退の意圖)を秘めていたのかもしれない。

- (23) 『朝鮮王朝實錄』太祖三年八月庚辰條。上相宅于舊關之基、觀望山勢。問尹莘達等曰、「此地何如。」對曰、「我國境內、松京爲上、此地爲次。所可恨者、乾方低下、水泉枯涸而已。」上悅曰、「松京亦豈無不足處乎。今觀此地形勢、可爲王都。況漕運通、道里均。於人事亦有所便乎。」上問王師自超、「此地如何。」超對曰、「此地、四面高秀、中央平衍。宜爲城邑。然從衆議、乃定。」上令諸宰相議之。僉曰、「必欲遷都、此處爲可。」河崙獨曰、「山勢雖似可觀、然以地法論之、則不可。」上以衆人之言、定都漢陽。／同、辛卯條。都評議使司所申、「左政丞趙浚、右政丞金士衡等、竊惟、自古王者、受命而興、莫不定都、以宅其民。……惟我東方、檀君以來、或合或分、各有所都。及前朝王氏統合之後、都于松嶽、子孫相傳、殆五百年。運祚卽終、自底于亡。恭惟殿下、以盛德神功、受天之命、奄有一國。卽更制度、以建萬世之統、宜定厥都、以立萬世之基。竊觀漢陽、表裏山河、形勢之勝、自古所稱。四方道里之均、舟車所通。定都于茲、以永于後、允合天人之意。」王旨依申。／同、九月丙午條。遣判門下府事權仲和、判三司事鄭道傳、青城伯沈德符、參贊門下府事金湊、左僕射南閭、中樞院學士李

稷等、如漢陽、定廟社・宮闕・朝市・道路之基。仲和等以前朝肅王時所營宮闕舊址狹隘、更相其南、亥山爲主、壬座丙向、平衍廣闊、群龍朝揖、乃得面勢之宜。又相其東數里之地、得坎山爲主、壬座丙向、以爲宗廟之基。皆作圖以獻。／同、庚申條。判三司事鄭道傳等、回自漢陽。青城伯沈德符、參贊門下府事金湊、留管經營。／同、十月辛卯條。遷都漢陽。留各司二員于松京。以門下侍郎贊成事崔永沘、商議門下府事禹仁烈等、爲分都評議使司。／同、甲午條。至新都、以舊漢陽府客舍爲離宮。

(24)

『遼史』卷三十八、地理志二、東京道、東京遼陽府條。東京遼陽府、本朝鮮之地。周武王釋箕子囚、去之朝鮮、因以封之。作八條之教、尙禮義、富農桑。外戶不閉、人不爲盜。傳四十餘世、燕屬眞番・朝鮮、始置吏、築障。秦屬遼東外徼。漢初、燕人滿、王故空地。武帝元封三年、定朝鮮、爲眞番・臨屯・樂浪・玄菟四郡。後漢出入靑・幽二州、遼東・玄菟二郡、沿革不常。漢末、爲公孫度所據、傳子康、孫淵。自稱燕王、建元紹漢。魏滅之。晉陷高麗。後歸慕容垂、子寶、以勾麗王安爲平州牧、居之。元魏太武遣使、至其所居平壤城。遼東京本此。唐高宗平高麗、於此置安東都護府。後爲渤海大氏所有。大氏始保挹婁之東牟山。武后萬歲通天中、爲契丹盡忠所逼。有乞乞仲象者、度遼水、自固。武后封爲震國公。傳子祚榮、建都邑、自稱震王、併吞海北。地方五千里、兵數十萬。中宗賜所都曰忽汗州、封渤海郡王。十有二世、至彝震、僭號改元、擬建宮闕、有五京・十五府・六十二州、爲遼東盛國。忽汗州、卽故平壤城也。號中

京顯德府。太祖建國、攻渤海、拔忽汗城、俘其王大諲譔、以爲東丹王國。立太子圖欲爲人皇王、以主之。神冊四年、葺遼陽故城、以渤海・漢戶、建東平郡、爲防禦州。天顯三年、遷東丹國民居之、升爲南京。

(25)

以下、高句麗遺民の遷徙については、鳥山喜一『渤海史上の諸問題』(一九六八年、東京、風間書房)、金翰奎『遼東史』(二〇〇四年、ソウル、文學と知性社)、その他を参照しつつ、略述する。

(26)

『隋書』卷六十七、裴矩傳。從帝(楊帝)巡于塞北、幸啓民帳。時高麗遣使、先通于突厥。啓民不敢隱、引之見帝。矩因奏狀曰、「高麗之地、本孤竹國也。周代以之封于箕子、漢世分爲三郡、晉氏亦統遼東。今乃不臣、別爲外域。故先帝疾焉、欲征之久矣。但以楊諒不肖、師出無功。當陛下之時、安得不事、使此冠帶之境、仍爲蠻貊之鄉乎。今其使者朝於突厥、親見啓民合國從化、必懼皇靈之遠暢、慮後伏之先亡。矜令入朝、當可致也。」帝曰、「如何。」矩曰、「請面詔其使、放還本國、遣語其王、令速朝覲。不然者、當率突厥、即日誅之。」帝納焉。高元不用命。始建征遼之策。／『北史』裴矩傳、『舊唐書』裴矩傳、『新唐書』裴矩傳もほぼ同文。

(27)

『史記』卷四、周本紀。伯夷・叔齊、在孤竹。張守節正義。括地志云、「孤竹故城、在平州盧龍縣南十二里。殷時諸侯孤竹國也。姓墨胎氏。」／『大明一統志』卷五、永平府、古蹟。孤竹國「在府城西一十五里。殷孤竹國君所封之地」。

- (28) 『晉書』卷十四、地理志上、平州。案、禹貢冀州之域。於周爲幽州界。漢屬右北平郡。後漢末、公孫度自號平州牧。及其子康、康子文懿、並擅據遼東。東夷九種、皆服事焉。魏置東夷校尉、居襄平、而分遼東・昌黎・玄菟・帶方・樂浪五郡爲平州。後還合爲幽州。及文懿滅後、有護東夷校尉、居襄平。咸寧二年十月、分昌黎・遼東・玄菟・帶方・樂浪等郡國五、置平州。統縣二十六、戶一萬八千一百。
- (29) 『資治通鑑』卷八十八、晉紀十、愍帝建興元年四月條。遼東張統、據樂浪・帶方二郡、與高句麗王乙弗利相攻、連年不解。樂浪王遵、說統、帥其民千餘家、歸廐。廐爲之置樂浪郡〔注略〕、以統爲太守、遵參軍事。
- (30) 『魏書』卷四上、世祖紀(太武帝)、延和元年六月庚寅條。車駕伐和龍。／同、九月乙卯條。車駕西還。徙營丘・成周・遼東・樂浪・帶方・玄菟六郡民三萬家于幽州、開倉以賑之。
- (31) 『晉書』卷十四、地理志上、平州。平州初置、以慕容廆爲刺史、遂屬永嘉之亂、廐爲衆所推。及其孫偶、移都于薊。其後、慕容垂子寶、又遷于和龍。自幽州至於盧溥鎮以南地、入於魏。
- (32) 『魏書』卷一百六上、地形志上、營州。樂良郡〔前漢武帝置。二漢・晉曰樂浪。後改、罷。正光末、復。治連城〕。領縣二。……永洛〔注略〕。帶方〔二漢屬。晉屬帶方。後罷。正光末、復屬〕。
- (33) 『魏書』卷一百六上、地形志上、平州。北平郡〔秦置。領縣一。……朝鮮〔二漢・晉屬樂浪。後罷。延和元年、徙朝鮮民於肥如、復置、屬焉〕。』
- (34) 『資治通鑑』卷一百五十、梁紀六、武帝普通五年十月條。魏營州城民劉安定・就德興、執刺史李仲遵、據城反。城民王惡兒、斬安定以降。德興東走、自稱燕王。／同月條。魏使黃門侍郎盧同、持節、詣營州、慰勞。就德興降而復反。詔以同爲幽州刺史、兼尚書行臺。同屢爲德興所敗而還。／『資治通鑑』卷一百五十一、梁紀七、武帝普通七年九月條。就德興、陷魏平州、殺刺史王買奴〔胡注〕魏平州治肥如、即唐平州盧龍縣地。／『資治通鑑』卷一百五十三、梁紀九、武帝中大通元年十一月己卯條。就德興請降於魏。營州平。／なお、この時期の北魏と高句麗との關係を示唆する重要な史料に『韓暨墓誌』があるが、そこには「孝昌失馭、高麗爲寇、被擁遼東」という記述が見えていて注目される。井上直樹『韓暨墓誌』を通してみた高句麗の對北魏外交の側面——六世紀前半を中心に——(『朝鮮學報』第七十八輯、二〇〇一年、天理、朝鮮學會)、參照。
- (35) 『魏書』卷一百六上、地形志上、南營州。南營州〔孝昌中、營州陷。永熙二年置。寄治英雄城〕。領郡五、縣十一。……營丘縣〔天平四年置〕。領縣三。……帶方〔元象中置〕。樂良郡〔天平四年置〕。領縣一。戶四十九、口二百三。永樂〔興和二年置〕。
- (36) 北魏・文成帝(高宗)の妃、文明皇后馮氏の母は「樂浪王氏」であるという(『魏書』卷十三、文成帝、文明皇后馮氏傳)。また文成帝の弟の「樂浪王」萬壽は、その生母は未詳であるが、恐らくは文明皇后馮氏の縁者の所生であ

ろう(『魏書』卷十九上、景穆十二王列傳上)。この「樂浪王」の家系は、「樂浪郡(僑郡)」と何らかの意味で關係を持っていたことは間違いない。

(37) 前掲注(27)、參照。

(38) 『大明一統志』卷五、永平府、古蹟。孤竹國「在府城西一十五里。殷孤竹國君所封之地」。……朝鮮城「在府城內相傳、箕子受封之地。後魏置縣、屬北平郡。北齊省入新昌縣」。／永平府は今日の河北省盧龍である。なお、朝貢使節の一員としてこの地を訪れた朴趾源は、『熱河日記』卷二、關內程史、秋七月二十四日庚子の條に、「或曰、永平亦箕子封地、非也。永平即漢之右北平、唐之盧龍塞」と述べて、永平府を箕子の封地とする傳承を、ここでは言下に否定している。

(39) 一説に、朝鮮の「海州」の地は「孤竹國」の故地であるというが、それは恐らく『隋書』裴矩傳の記述に附會した後世の朝鮮の創作にすぎないであろう(『新增東國輿地勝覽』海州の項、參照)。

(40) 『遼史』卷三十九、地理志三、中京道、中京大定府、高州三韓縣條。高州、觀察。唐信州之地。萬歲通天元年、以契丹室活部置。開泰中、聖宗伐高麗、以俘戶置高州。有平頂山・灤河。屬中京。統縣一。三韓縣。辰韓爲扶餘、弁韓爲新羅、馬韓爲高麗。開泰中、聖宗伐高麗、俘三國之遺人、置縣。戶五千。／『金史』卷二十四、地理志上、北京路、大定府、三韓縣條。三韓。遼伐高麗、遷馬韓・辰韓・弁韓三國民爲縣、置高州。太祖天輔七年、以高州置節度使。皇

統三年、廢爲縣。承安三年、復陞爲高州、置刺史、爲全州支郡、分武平・松山・靜封三縣、隸焉。泰和四年、廢。有落馬河・塗河。

(41) 丸龜金作「元・高麗關係の一齣——瀋王について——」

(『靑丘學叢』第十八輯、一九三四年、京城、靑丘學會)／岡田英弘「元の瀋王と遼陽行省」(『朝鮮學報』第十四輯、一九五九年、天理、朝鮮學會)／河内良弘「明代遼陽の東寧衛について」(『東洋史研究』第四十四卷第四號、一九八六年、京都、東洋史研究會)／朴彥「明代における朝鮮人の遼東移住」(『東洋史研究』第六十七卷第一號、二〇〇八年、京都、東洋史研究會)。

(42) 『漂海錄』卷三、弘治元年五月二十四日條。晴。有僧戒勉者、能通我國語音、謂臣曰、「僧系本朝鮮人。僧祖父逃來于此、今已三世矣。此方地近本國界、故本國人來住者甚夥。中國人最怯懦無勇。若遇賊、皆投戈奔竄、且無善射者。必抄本國人向化者、以(謂)「爲」精兵、以爲先鋒。我本國一人、可以當中國人什百矣。此方即古我高句麗之都、奪屬中國、千有餘載。我高句麗、流風遺俗、猶有未殄。立高麗祠、以爲根本、敬祀不忘。不忘本也。嘗聞鳥飛返故鄉、狐死必首丘。我等亦欲返本國以居。但恐本國反以我等爲中國人、刷還中國、則我等必服逃奔之罪、身首異處。故心欲往而足趑趄耳。」

(43) 『漂海錄』卷三、弘治元年五月二十八日條。……遼東、即舊我高句麗之都、爲唐高宗所滅、割屬中原。五代時、爲渤海太氏所有。後又爲遼・金・胡元所併。／ちなみに、崔

溥が「遼東」を「高句麗の都」であるとするのは、恐らく高句麗の都（平壤）の前身である「樂浪郡」の州治、すなわち衛氏朝鮮の都の「王險城」が、『史記』朝鮮傳に引く應劭の注では、「遼東の險瀆縣」に所在したと指摘されていることに基つのである。（『史記』卷一百一十五、朝鮮傳。都王險。（唐・司馬貞）索隱。韋昭云、「古邑名」。徐廣曰、「昌黎有險瀆縣」。應劭注、「地理志、遼東險瀆縣、朝鮮王舊都」。臣瓚云、「王險城、在樂浪郡湊水之東」也。）あるいはかれは、高句麗の初期の都である國內城（九都）を、遼東城（遼陽）に誤つて比定しているのかもしれない。

- (44) 『漂海錄』卷三、弘治元年六月初四日條。……海州・遼東等處人、半是中國、半是我國、半是女真。石門嶺以南、至鴨綠江、都是我國人移住者。其冠裳語言及女首飾、類與我國同。

- (45) 遼東の渤海系の人々を「朝鮮民族」の一部として捉えるか、それとも「中華民族」の一部として捉えるかは、韓國・朝鮮と中國との間で歴史認識の相違の著しい部分である。

- (46) 尹根壽「月汀漫筆」（『月汀集』別集卷四）。廣寧城北五里許、有箕子井。傍近、舊有箕子廟。有箕子戴方巾塑像。嘉靖間、爲癩子所燒。今廢。廣寧在箕子封內、無亦箕子留駐於此地而有井及廟耶。／『月汀集』は『韓國文集叢刊』四十七所收の影印本による。

- (47) 『熱河日記』卷一、渡江錄、（乾隆四十五年）六月二十

八日乙亥條。……『唐書』裴矩傳言、「高麗、本孤竹國、周以封箕子。漢分四郡。」所謂孤竹地、在今永平府。又廣寧縣、舊有箕子廟。戴昂冠塑像。皇明嘉靖時、毀于兵火。廣寧、人或稱平壤。『金史』及『文獻通考』、俱言廣寧、咸平、皆箕子封地。以此推之、永平・廣寧之間、爲一平壤也。『遼史』渤海顯德府、本朝鮮也。箕子所封平壤城。遼破渤海、改爲東京、即今之遼陽縣是也。以此推之、遼陽縣爲一平壤也。愚以爲、箕子初居永廣之間、後爲燕將秦開所逐、失地二千里、漸東益徙、如中國晉宋之南渡、所止皆稱平壤。今我大同江上平壤、即其一也。

- (48) 『日知錄』卷二十九、三韓。今人謂遼東爲三韓者、考之『書』序、……今人乃謂遼東爲三韓、是以內地而目之爲外國也。原其故、本于天啓初失遼陽以後章奏之文、遂有謂遼人爲三韓者。外之也。今遼人乃以之自稱、夫亦自外也已。

- (49) 李圭景『五洲衍文長箋散稿』卷四十六、三韓有二辨證說。三韓之名、創自我東、而遼東亦稱三韓。顧亭林『日知錄』……亭林之論雖然、遼東即燕之幅員也。有一事可疑者。漢・王符『潜夫論』、「昔周宣王時、亦有韓侯。其國近燕。故『詩』云、『普彼韓城、燕師所完。』其後韓西亦姓韓、爲衛滿所伐、遷居海中云。」夷考其說、則箕子之後箕準、爲燕人衛滿所逐、浮海而南爲馬韓。則恐指「此」而爲言也。『燕史』、『詩』云、「其（逐）其（追）其（逐）」、燕師之北國也。韓在燕北、猶爲韓之北國。韓既歸于燕、韓從而東徙。漢初、謂之三韓。其所指歸、亦似箕氏。則意者箕準南遷稱韓之前、其在朝鮮之地、亦有韓名。而其時遼東西、盡爲朝鮮之



地。則從而稱韓、不是異事。世代雖嬗、地名遽變、然冒稱舊名、亦不足爲怪。可以近事爲證者、如高麗已亡、而我國以朝鮮建號、則中原人當以朝鮮爲稱、而每呼以高麗、則沿舊稱而不能遽改也。且如唐亡、今已千有餘載、而我東尙呼中原爲唐、稱中原物曰唐物。計自唐歷幾代、而奚獨稱唐耶。遼東之稱三韓者、何異於此哉。深究稱韓之緣起、恐如是爾。／引用は奎章閣本の影印本（一九八二年、ソウル、明文堂）による。底本には「其逐其貊」とあるが、通行の『詩經』本文に照らして「逐」字を「追」字に改める。

- (50) 和田清「滿洲を三韓といふことについて」（『東亞史研究』（滿洲篇）所收、一九五五年、東京、東洋文庫）

- (51) 『潛夫論』卷九、志氏姓第三十五。昔周宣王、亦有韓侯。其國也近燕。故詩云、「普彼韓城、燕師所完」。其後、韓西（朝鮮？）亦姓韓。爲（魏）〔衛〕滿所伐、遷居海中。／『三國志』卷三十、魏書、東夷、韓傳注。魏略曰、其子及親、留在國者、因冒姓韓氏。準王海中、不與朝鮮相往來。『明史』卷九十七、藝文志二、史類十、地理類に「郭造卿『燕史』一百二十卷」を著録する。同書の鈔本の影印本が『古燕史』（二〇〇八年、北京、學苑出版社）として刊行されているが、これは三十四卷のみの殘闕本で、當該引用部分の記述は見當たらない。恐らくこれは、上記の鈔本に含まれない「燕貊紀（高句麗その他に關する記述）」の項からの引用であろう（上記影印本「出版説明」、及び

- 「高錫蕃跋」、參照）。／ただし「燕史」の當該の記述は、韓國古典翻譯院編『五洲衍文長箋散稿』電子テキスト版、卷三十五、三韓始末辨證說の項の註釋にも既に指摘しており、『欽定日下舊聞考』卷一百二十四にも同文が引用されている。したがって、當該の記述は實際には『欽定日下舊聞考』からの引用である可能性が高い。／『欽定日下舊聞考』卷一百二十四、京畿、固安縣。【補】詩曰、其追其貊。燕師之北國也。韓在燕北、貊爲韓之北國。韓既歸於燕、韓從而東徙。漢初謂之三韓『燕史』。【朱昆田原按】郭氏之說、與『潛夫論』相發明。／韓國古典翻譯院ホームページ（<http://www.minchu.or.kr>）

- (53) 『書經』周書・周官の僞孔傳によると、周の武王は「駒麗・扶餘・駢貊の屬」を服屬させた。一説に、この「駢韓」が東遷して「三韓」になったという。しかし僞孔傳は後世の僞作であるから、それ自體、信を置くことは難しいうえに、「駢貊」の「駢（＝韓）」を『詩經』の韓侯と同一視することには何の根據も見出すことができない。

- (54) 『三國志』卷三十、魏書、東夷、韓傳、注。魏略曰、昔箕子之後朝鮮侯、見周衰、燕自尊爲王、欲東略地、朝鮮侯亦自稱爲王、欲興兵、逆擊燕以尊周室。其大夫禮諫之、乃止。使禮西說燕、燕止之、不攻。後子孫稍驕虐。燕乃遣將秦開、攻其西方、取地二千餘里、至滿番汗爲界。朝鮮遂弱。

## THE UNDERSTANDING OF THE ANCIENT JOSEON DYNASTIES DURING THE EARLY-MODERN JOSEON DYNASTY

YAGI Takeshi

Behind the use of Joseon, the early-modern country's name, was the consciousness that the country was the legitimate successor of Dangun Joseon 檀君朝鮮 and the ancient state of Gija Joseon 箕子朝鮮, which were thought to have actually existed in ancient times. The legends of Dangun Joseon and Gija Joseon are each indivisibly tied to the area of present-day Pyeongyang, and Seoul, the new capital of the Joseon dynasty, had from olden times been known as Pyeongyang of the South.

Pyeongyang had flourished as the seat of government of Nangnang 樂浪郡 district, but with the southern advance of Goguryeo, Nangnang was destroyed and a temporary seat of government 僑郡 for the region was established in Liaodeng/Liaoxi 遼東・遼西 area. Pyeongyang once again flourished as the capital of Goguryeo, but with the Tang dynasty's destruction of Goguryeo, exiles streamed into the Liaodeng/Liaoxi region. These people brought with them to Liaodeng and Liaoxi the memory of the land around Pyeongyang that symbolized past glories and legend of Gija Joseon, which was inextricably tied to the Pyeongyang region. The people of early-modern Joseon who later "discovered" the legend came to see precisely this as proof of Gija Joseon's control of Liaodeng/Liaoxi, and came to argue that Gija Joseon had moved from Pyeongyang of Liaoxi, to Pyeongyang of Liaodeng, and finally to Pyeongyang of the Korean peninsula.

This image of the territory of Gija Joseon, of course, overlapped with that of the territory of the Joseon kingdom of Dangun, the progenitor of the people. In this manner the image of the territory of the Ancient Joseon 古朝鮮 dynasties was "proven" through the records in the Chinese histories for early-modern Joseon.